

KONAN UNIVERSITY

日韓社会の人生儀礼における「祭」とその始まり： 前近代の状況を踏まえて

著者	金 泰虎
雑誌名	言語と文化
巻	14
ページ	159-178
発行年	2010-03-15
URL	http://doi.org/10.14990/00000498

日韓社会の人生儀礼における「祭」とその始まり

—前近代の状況を踏まえて—

金 泰 虎

問題の所在

日韓社会では、「冠婚葬祭」という言葉が共通して使われており、これらは人生の「通過儀礼」、または「人生儀礼」と言われている。この「冠婚葬祭」のそれぞれを「冠礼」・「婚礼」・「葬礼」・「祭礼」とも称しており、概ね人生において時系列的に営まれる儀礼という認識が強い。つまり、生まれてから「冠礼」でもって成人となり、次に「婚礼」の結婚を行い、歳をとることで、いつかは死を迎えて「葬礼」、その後は「祭礼」を行うという順序が一般的な認識である。

ここで、まず「葬」は「葬式」・「葬礼」・「葬儀」・「喪礼」などの多様な用語が使われ、「祭」（祭礼）も、日本では「法事」・「法要」（仏教）、「霊祭」（神道）、韓国では「祭祀」（儒教）とするなど、用語に違いがあることを明記しておく。

ところで、「葬祭」に関する先行研究や一般的な認識では、「葬祭」が時系列的な儀礼、つまり各々が完結して行われ、次に移行していく「礼」と見なされているため、「祭」の始まる時点については、あまり関心を払われてこなかった。しかし、「葬」が完了してから「祭」が営まれるという構図の認識は、果たして正しいのだろうか。例えば、宮田登氏は「祭は、神霊を迎え祀る意味であり、この場合は葬のあと死霊を怨霊化させないように丁重な供養を行うこと、そして死霊の祖霊化という目的のために、祖先祭祀を行うことであった」としている⁽¹⁾。まさしく「葬祭」は時系列的に進める儀礼であるという認識であり、また「祭」は神霊を迎え祀る行いであるという定義となっている。

孔子は「生事之礼、死葬之以礼、祭之以礼」とし、生きている時の礼を死後にも「祭」という礼で行うことを説いている⁽²⁾。この生きている時の礼とは、奉食と礼儀が考えられるが、死後の礼としての「祭」では、供物がそれに該当すると言える。

したがって本稿では、日韓において時系列的に見なされている「葬」を完了してからの「祭」、つまり「忌明け（イミアケ＝キアケ）」後に行われる「法事（法要）」・「霊祭」、「忌祭祀」を取りあげることとする。そこで、「忌明け」後に行われる「祭」と、「葬」から「忌明け」までの間に行われる諸儀式において、各々の供物の比較、検証を行う。この供物の分析は、何をもって「祭」と言われているのか、その始まりはいつなのかを探る手がかりになる。

この試みの中で、「葬」の過程、「葬祭」の区切り、「忌明け」、「忌明け」後の「祭」やその種類、そして「祭」の「弔い上げ（トムライアゲ）」までを取りあげて、日韓の比較分析

を行い、その特徴も明らかにしたい。主に、現代の「祭」を中心に考察しながらも、必要に応じて前近代の「祭」にまで遡って検討を行う。

なお、日韓における「葬祭」には、仏式・神式・キリスト式・儒教式などの様々な要素が融合しているため、その混合も明確にしつつ、「葬」の過程に行われる諸儀式の中から「祭」の要素を追究する。

ところで、比較をする際、日韓における宗教や宗派、そして地域や家庭によって相違点があるのを勘案して、なるべく「葬祭」に関して共通している事項を中心に考察していく。また、「葬祭」が行われる対象は、「婚礼」を行い、子供を授かった人を前提にする。というのも、韓国では前者と比べて、未婚の男女に対して、「葬祭」のやり方に違いがあるためである。

1. 日韓の「忌明け」後に行われる「祭」

(1) 日本の「祭」における供物

「祭」とはどういったものなのかを具体的に把握するため、従来の時系列的な認識に基づく「葬」の後に行われる「祭」、つまり「忌明け」後の「祭」を取りあげることにする。この「祭」こそが典型的な「祭」であり、それは日本の「法事(法要)」「(仏式)・(霊祭)」「(神式)」である。この「祭」を、比較を行う上で基本モデルと見なし、「葬」の過程から「忌明け」までの間に行われる諸儀式との比較を行っていく。そこで、まず基本モデルの「祭」における供物がどんなものなのかを確認する。但し、地域や宗教、ひいては宗派や家庭によって多少の差があることも改めて明記しておく。

仏式の「忌明け」後の「祭」においては、一般的に供物はほとんど供えない。しかし、一部の浄土宗では赤いお膳に精進料理(肉と魚を回避して作った料理)を捧げる。以下の(写真1)における赤いお膳は実際に供えるものであるが、大きさは日常で使う器(食器)と比べて、四分の一か、三分の一程度しかないミニチュアのようなものである。赤色の意味は、死者が成仏した喜びを表している⁽³⁾。

一方、神式の「祭」における供物は、「葬」の過程で行われる儀式[(表2)を参照]、つまり通夜祭か、あるいは出棺祭から供えるものと同じで、それは一般的に米・塩・酒・餅・果物・鯛・野菜・乾物(昆布)である。

(写真1) 浄土宗法事の供物



(2) 韓国の「祭」における供物

韓国では、「葬」が終了して「忌明け」(韓国

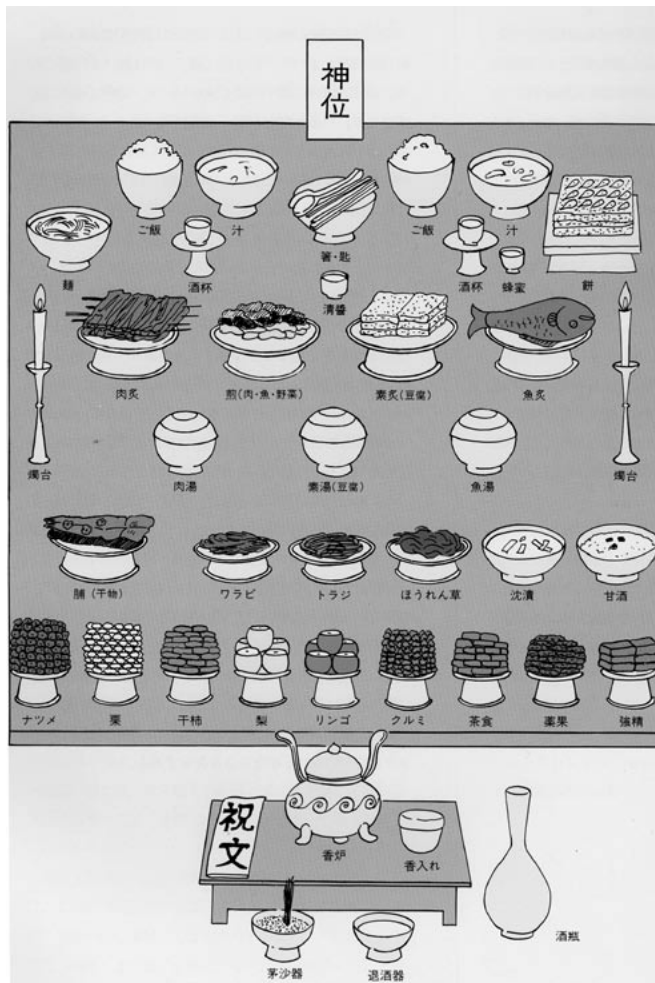
では、脱喪とする)後に行う「祭」(韓国では、祭祀という)の種類は多い。そこで、代表的な「祭」とも言える「忌祭祀」[(表9)を参照]を取りあげて、その供物(韓国では、祭需という)を明らかにしたい。

日本と同様、この「忌祭祀」を韓国における「祭」の基本モデルとし、「葬」から「忌明け」までの間に行われる諸儀式における供物との比較を行う。但し、韓国では、一般的には儒教式で行われるものの、地域や家庭によって多少の相違が存在する。

(写真2)にみる供物は⁽⁴⁾、基本的に日本の神式とほぼ同じ構成と言える。つまり、前列の果物、2列目の乾物や野菜、4列目の魚、最後の列の餅・清醬(神式の塩)・酒・飯(神式の米)である。この「祭」には、飯と他の供物、つまり「果酒脯醢」・餅・煎などがセットになって捧げられている⁽⁵⁾。ここで、脯は乾物、そして醢は肉を塩漬けたものである。

このように、「忌明け」後に行われる「祭」において、日本の仏式では、一部の宗派を除

(写真2) 儒教式の「祭祀床」



いて供物はほとんど供えないのに対し、神式と韓国の儒教式では互いに類似した供物を供えており、また米（飯）と他の供物がセットになっているのが特徴と言える。

2. 日韓における「葬」

(1) 日本の「葬」

「葬祭」を時系列的に行う儀礼と見なした場合、人の死によって「葬」が行われて、その次に「祭」を行うということになる。しかし、果たしてこの認識で正しいのだろうか。「祭」の始まりを把握するためには、死後に行われる一連の諸儀式における供物を分析して、「忌明け」後の「祭」の供物と比較する必要がある。

ところで、「葬」の過程でありながらも、特に神式では「祭」という名称の儀式が多いが、時系列的な儀式と見なす「祭」における供物との間にはどんな違いがあるのだろうか。この考察は、「祭」の始まりはもとより、「葬」と「祭」の関わりについても明確にすることができると思う。

日本では、「葬式仏教」と言われるように、ほとんどの「葬」は仏式で行われているのが現状である。この状況は、江戸時代に檀家制度が敷かれて、誰もが菩提寺をもち、檀家になるのを求められて、寺で「葬」を行うことが勧められた影響によるものと考えられる。

ごく一部では、神式（神葬祭、葬礼）でも行うものの、神式が「葬」に取り入れられるようになったのは、近年になってからであり、その歴史は浅い。つまり、明治期に入って、天皇を中心とした国家神道の政策に基づいて「神仏分離令」が發布され、「神葬祭」が解禁された。しかし、神道は国家のまつりごとであって、宗教行為とも言える「神葬祭」に携わるのは否定された。例えば明治15（1882）年、内務省の通達によって官弊社・国弊社の宮司が「神葬祭」にかかわるのを禁じられた⁽⁶⁾。戦後になって、国家神道が廃止され、宮司が「神葬祭」に加わるのが全面的に認められたのである。

そして、一部ではキリスト式の「葬」も行われているが、ここでは仏式や神式の「葬」だけを取りあげて、その過程を整理して見ることにする⁽⁷⁾。

(表1) 日本の「仏式」・「神式」における「葬」の過程

形式	葬の過程
仏式	死→末期の水→湯灌→死に化粧→死に装飾→北枕→枕飾り→枕経・枕づとめ→戒名→納棺→通夜→葬儀→告別式→出棺→火葬→骨揚げ→遺骨の迎え→精進落とし
神式	死→末期の水→湯灌→死に化粧→死に装飾→北枕→枕直しの儀→帰幽奉告の儀→納棺の儀→柩前日供の儀→葬場前日の儀→御霊うつしの儀→葬場祭→出棺祭→祓除の儀→火葬祭→骨揚げ→埋葬祭→帰家祭→翌日祭

日本における仏式の「葬」は、概ね（表1）のように行われるが、神式の「葬」も、その過程は仏式と類似している。この両者の諸過程における相違点は多くないものの、神式では供物を捧げるという点が異なっている。そこで、さらに神式の「葬」における「霊祭」を整理したい⁽⁸⁾。

（表2）神式の「神葬祭」における「霊祭」

神葬祭の過程	霊祭の種類
枕直しの儀	常饌
柩前日供の儀	出棺まで朝夕の常饌
葬場前日の儀	通夜祭
御霊うつしの儀	遷霊祭
葬場	葬場祭
出棺	出棺祭
火葬	火葬祭
納骨	埋葬祭
葬礼後帰宅	帰家祭
葬礼後2日目	翌日祭

日本における「葬」は、寺で行うことはあるものの（教会でも行う）、神社では行わない。また最近では、自宅で「葬」を行うことはほとんどなく、寺・会館・公民館・教会などで行うのが一般的である。そこでは、僧侶・神主・神父・牧師と言った故人の宗教とかかわる聖職者が取り仕切るのである。

そこで、（表1）や（表2）の「葬」における一連の過程で行われる、供物や「祭」と名付けられる儀式の時期をより明確にするため、以下の（表3）のようにまとめて示すことにする。

（表3）日韓における「葬」の過程

諸過程	諸儀式			
葬祭の区切り	A	B	C	D
一般的な葬祭の認識	生	前→死……………葬→	□□□□□□→	祭
忌明けの期間		忌中：喪中Ⅰ→	忌中：喪中Ⅱ→	忌明け(脱喪)
葬～忌明けの食事	食	事→常饌(上食)①→	常饌(上食)②→	↓→
祭		祭(祭祀)①→	祭(祭祀)②→	法事・霊祭(祭祀)③

* () は、韓国の用語
 * 網掛けは、日韓共通の用語

ここで、まずどの時点までを「葬」の期間と見なすのか。（表3）におけるBの「死……………葬→」、つまり（表1）の仏式の「精進落とし」、（表1）や（表2）の神式の「翌

日祭」までを「葬」と見なして、これを狭義の「葬」と定義したい。この定義の背景には、亡骸を火葬して、死後の儀式が一段落するという区切りができるからである。この狭義の「葬」における最後に、仏式では遺骨・位牌（白木）、神式では位牌（霊璽・御霊代）をもって帰宅する。

ところで、日本では仏式だけではなく、いずれの形態の「葬」においても火葬が義務づけられている。火葬後は、仏式では遺骨をもって帰宅し（遺骨の迎え）、49日に納骨するまで自宅の仏壇に安置することが多く、一部では納骨せず自宅においておくこともある。この「遺骨の迎え」や「精進落とし」の時期を（表3）の上で示すと、Bの「→」に行われる儀式と言える。

一方、神式では、火葬後、すぐ納骨（埋葬祭）するのが一般的であり、遺骨をもって帰宅はしない⁽⁹⁾。遺骨ではなく、位牌（霊璽・御霊代）をもって帰宅し、牌前で「葬」が終わったことを報告する「帰家祭」を行う。その翌日、位牌（霊璽・御霊代）ないし墓前で「葬」が無事に済んだことを報告する「翌日祭」をもって、「葬」を終える。この「帰家祭」と「翌日祭」は（表3）のBの「→」の期間に行われる儀式である。

ちなみに、キリスト式では、独自の式次第に基づく「葬」は行うものの⁽¹⁰⁾、遺骨の納骨は仏式、あるいは神式の方式を取り入れている。

ところで、仏式では、この狭義の「葬」の期間中、（表1）の「枕飾り」後、次の（写真2）のように⁽¹¹⁾、死者に線香・ろうそく・花、そして水や「枕飯」（一膳飯）を供える（枕だんごやお茶を捧げることもある）。この「枕飯」は、箸を立てるのだが、浄土宗では箸を1本立てる。これは死者がこの世に帰ってこないという意味合いである。この後の「葬」の過程ではほとんど「飯」を捧げない。ここで香に関して、そもそも「香典」は「香奠」ともいい、「奠」は供えるという意味がある。つまり、「香奠」とは、香を供えるという意味になり、仏

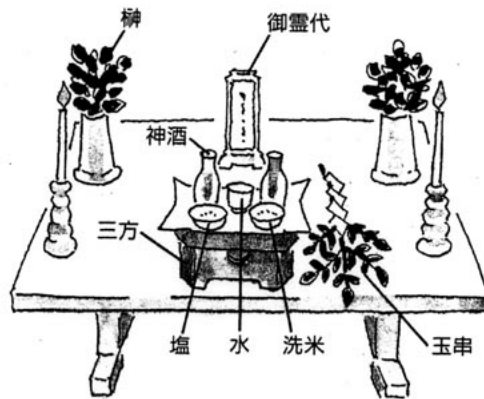
（写真3）仏式の「枕飯」



式では欠かせない供養なのである⁽¹²⁾。

その反面、神式では(表1)や(表2)における「枕直しの儀」の後、次の(写真4)のように⁽¹³⁾、供物として塩・水・酒、そして「常饌」(飯・米)に加えて、榊・ろうそく・玉串を供える。この「常饌」は、「柩前日供の儀」(出棺)までの朝夕に欠かさず供える。ところで、神社や地域によっては、「葬場前日の儀」(通夜)の「通夜祭」から、「常饌」の飯ではなく米に切り替えて、「火葬祭」・「埋葬祭」・「帰家祭」・「翌日祭」に至るまで、「忌明け」と同じような供物である米・塩・酒・餅・果物・鯛・野菜・乾物(昆布)などを供えることもある。

(写真4) 神式の「常饌」



ここで、(表2)の神式における「葬」の過程で「祭」と名付けている「〇〇祭」では、「常饌」(飯・米)に加えて、他の供物をセットにして捧げていることに注目したい。この供物の供え方は、時系列的な儀式と見なしていた「忌明け」後の「祭」における供物と同じなのである。つまり、「葬」の過程で供えた供物と、「祭」で供えた供物が同じである。なお、キリスト式では、一切、死者に「常饌」は供えない。

(2) 韓国の「葬」

韓国における「葬」は「葬式」とはせず、「葬礼」・「喪礼」・「葬儀」と言われるが、宗教や宗派、そして地域や過程を問わず、いずれも儒教式で行うのが一般的である。

韓国における儒教式の「葬」は、基本的に家で行われてきた。しかし最近では、病院附属の葬儀屋で「葬」を行うことが多くなっている。ところで、故人が仏教、あるいはキリスト教を信奉した人であっても、僧侶・神父・牧師などの聖職者を「葬」に招いて、その過程を取り仕切らせることはほとんどない。したがって、その「葬」の内容は儒教式になり、諸儀式は親族や近親者の中で、儒教式の「葬」に詳しい人が取り仕切るのである。

この儒教式の「葬」の過程を整理したのが、次の（表4）である⁽¹⁴⁾。

（表4）韓国の儒教式における「葬」の過程

形式	葬の過程
儒教式	死→皁復（招魂）→哭→発喪→斂襲（小斂・大斂）→成服→治葬（永訣）→発靱（出棺）→土葬・火葬→虞祭（初虞祭・再虞祭・三虞祭）→省墓（墓参り）

（表4）の一連の過程は、（表3）のBの「死………葬→」期間で行われる。そこで、死（臨終）から「襲」までを「初終」とするが、「皁復」の際、まず死者をあの世に導く使者に捧げる「使者バップ（사자밥）」（使者の飯）を供える。

次の（表5）は、韓国の「葬」の中で時系列的に行われる諸儀式をまとめたものである⁽¹⁵⁾。

（表5）韓国の「葬」における「祭」（儒教式）

時期	祭祀の種類
臨終～埋葬	上食 朝夕奠（奠祭）
大斂後の成服	成服祭（成服奠）
治葬（永訣）	遺奠祭
出棺	発靱祭
埋葬地行の途中	路祭
埋葬直後	平土祭（封墳祭）
埋葬後の帰宅	初虞祭
初虞祭後の柔日	再虞祭
再虞祭後の剛日	三虞祭
三虞祭の翌日	省墓（墓参り）

ここで、一般的な韓国の「葬」とは、（表4）にみる死（臨終）から始まって「三虞祭」後の「省墓（墓参り）」で終了する。これをもって狭義の「葬」と定義する。なぜなら、この時点で亡骸を埋葬・火葬して、一連の儀式が一段落するためである。この狭義の「儀」が終わると、前近代においては位牌（韓国では、魂帛という）を祀堂⁽¹⁶⁾に安置する。しかし、現代におけるほとんどの家庭では祀堂を持っていないため、「三虞祭」が終わると位牌を燃やすのである。

ところで、韓国では朝鮮時代以来、儒教の影響により土葬の習慣が根強いが、最近は少しずつ火葬も広まっている。兎も角、火葬を行っても最終的には遺骨を埋葬することが多い。しかし、墓地を確保することができない人や、信仰によっては、山や川に骨を撒いたり、納骨堂におさめたり、または遺骨を樹木の下に埋める「樹木葬」も行う。韓国では、日本の仏式のように、遺骨をもって帰家することはほとんどない。

儒教式の「葬」では、一般的に（表5）のように朝夕に「上食」と「朝夕奠（奠祭）」を供える。この「上食」には、飯・スープ（または水）を供えるが、これは（表3）における生前の「食事①」を引き継ぐものであり、日本における仏式の「枕飯」や神式の「常饌」に類似しているものと言えよう。

さらに、この「上食」とは別に、朝夕に「酒果脯醢」の「奠」を供える⁽¹⁷⁾。この「奠」は、「上食」を下げてから捧げるもので、日本の神式の供物とほぼ同じである。

ちなみに、「大斂」の後、朝夕の「上食」の際に遺族は「哭」⁽¹⁸⁾を行うが、これを「朝夕哭」とする。そして、遺族は喪服を着て、「酒果脯醢」・餅・煎などを供えて、「成服祭（成服奠）」を行うのである。

引き続き、「出棺（発柩）」の際には「発柩祭」、埋葬地まで運ぶ途中では「路祭」を行う。この「路祭」は、知人や友人が村の入口で故人に対して最後の別れを行う「祭」である。

土葬の場合、埋葬地では山の神に「山神祭」、そして土を掘り起こすときは「開土祭」を行って埋葬をする。埋葬後、即座に「平土祭（封墳祭）」という「祭」を行う。

埋葬地から帰宅すると、持ち帰った位牌を安置して、「虞祭（初虞祭・再虞祭・三虞祭）」を行うが、その日のうちに「初虞祭」を行うのである。次の「再虞祭」は「初虞祭」の後、初めて迎える柔日に行く。この柔日とは、日辰（10干<甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸>を用いて日を表したもの）の中で、乙・丁・己・辛・癸に当たる日である。その後の「三虞祭」は⁽¹⁹⁾、剛日（甲・丙・戊・庚・壬）に行くが、柔日と剛日は一日おきの構造であるため、「三虞祭」は例外なく「再虞祭」の翌日になる。例えば、「葬」が柔日なら一日おいて、翌々日の三日目に「再虞祭」、四日目に「三虞祭」が行われる⁽²⁰⁾。一方、「葬」が剛日に行われた場合は、翌日が柔日であるため、二日目が「再虞祭」、三日目が「三虞祭」である。この「三虞祭」の後には、必ず「省墓（墓参り）」をするのが仕来りである⁽²¹⁾。

このように、（表5）の韓国の「葬」の過程において、「上食」と「朝夕奠（奠祭）」は別々に行われ、また「祭」と名付けられた諸儀式の供物は、「酒果脯醢」・餅・煎であり、「上食」は伴わない。なお、「三虞祭」後の「省墓（墓参り）」にも、酒・煎などの簡略化した供物を持参して参拝をする。つまり、「葬」における一連の諸儀式では、「忌明け」後の「忌祭祀」のような飯と他の供物がセットではなく、飯と供物が二分化されているのである。

（3）日韓の「葬」における供物の意味合い

『中庸』には「事死如事生，事亡如事存」と記されており⁽²²⁾、死んだ人に対しても、生きている人に対するのと同じように示されている。これは、生前や死後共に同じく食べ物を捧げるという意味であろう。日韓では、生前から死と伴って「常饌」や「上食」、そして供物で実現されていく。つまり、（表3）に沿って言えば、「食事」から「常饌（上食）①」へ遷り、そして供物を捧げるようになるのである。これはまた、すでに取りあげてきた孔子の「生事之礼，死葬之以礼，祭之以礼」、つまり生きている時の礼を死後にも礼として祭でもつ

て行うという教えとも通じるのである。このことから、死後の「祭」が「人生儀礼」, 「通過儀礼」の範疇に入れられて, 「冠婚葬」に「祭」が加えられたと考えられる。つまり, 死が人生儀礼の終わりではないという意味に転じられたのである。

このように, 「祭」を行うとき, 供物が根幹となっていると言える。日本における仏式の「枕飯」や神式の「常饌」, そして韓国における儒教式の「上食」, なお神式の塩・酒・餅・果物・鯛・野菜・乾物(昆布)や, 儒教式の「奠」における「酒果脯醢」は, 生きていたときの礼を死後にも行うという考えから, 「祭」に供える供物との類似性が見られる。

(表3)における神式の「常饌」と儒教式の「上食」は, 人が生きていたときにとる毎日の「食事」である。要するに, 生前の「食事」が死後(葬の期間中)の「常饌(上食)①」に受け継がれたものと言える。

ところで, 神式では「葬」において, 生前の食事と言える「常饌(飯)」と他の供物の果物・酒・塩などがセットで供えられており, すでに確認してきた「忌明け」後の日本の「祭」(霊祭)とも同じ内容である。しかし, 「葬」の過程における諸儀式で, 日本の仏式は一部の宗派だけが供物を供え, 韓国の仏式・キリスト式では, いずれも儒教式の供物である⁽²³⁾。

なお, 儒教式の「葬」では, 「上食」と「奠」(祭)の供物である「酒果脯醢」・餅・煎などが捧げられるというように, 供物が二分化している。しかし, 「忌明け」後の「忌祭祀」では「上食」と「奠」はセットになるのである。

以上, 日韓の「葬」における一連の儀式の中で, 「祭」の要素を含むもの, つまり「忌明け」後の「祭」と同じ, または類似している供物が供えられていることがわかる。つまり, 「葬」の中にみる「祭」と, 「忌明け」後の「霊祭」・「忌祭祀」の供物を比較してみると, 日本では「常饌」と他の供物がセットになっている。反面, 韓国では「上食」や「奠」が別途に行われているのである。儒教式の「葬」における「祭」と名付けられた儀式において, 供物と「上食」が別途に行われることや, また他の「路祭」などには「上食」がないことから, そもそも儒教式における「祭」とは, 「上食」を入れず他の供物だけを指していると推測される。

ところで, 供物だけではなく用語からも, 「葬祭」が時系列的な儀礼ではないと見なされていることが伺える。つまり, 「葬」の過程において, 日本では蠟燭・線香・花などを飾る台を「祭壇」, 韓国では「祭床」と言うことから, 「葬」の過程で「祭」が行われているという認識が表われていると言えよう。

3. 日韓における「葬」の後から忌明けまでの間に行われる「祭」

(1) 日本

(表3)におけるCの「□□□□□□→」, つまり(表6)の「ナナノカ(満中陰)」(49日)や「50日祭」まで, BとCを合わせた期間を広義の「葬」と定義する。この広義の期間は「喪中」, 「忌中」とするが, 「ナナノカ(満中陰)」や「50日祭」が終わると, 「忌明け(キ

アケ・イミアケ)」になる。

日本の仏式と神式における「葬」後から「忌明け」までの儀式を、以下の（表6）に整理して比較する⁽²⁴⁾。そこで、前者は「法事・法要」、後者は「霊祭」とする。

（表6）日本の「葬」後から忌明けまでの仏式の「法事」と神式の「霊祭」

仏式	時期	神式
逮夜	初7日の前夜	-
初7日	7日	-
-	10日	10日祭
フタナノカ	14日	-
-	1日と15日	月次祭
-	20日	20日祭
ミナノカ	21日	-
ヨナノカ	28日	-
初月忌	1ヶ月目の命日	-
-	毎月の命日	忌日祭
-	30日	30日祭
イツナノカ	35日	-
-	40日	40日祭
ムナノカ	42日	-
ナナナノカ（満中陰）	49日	-
-	50日	50日祭

日本の仏式では、「葬」後は7日ごとに、（表3）で示しているような「祭」を行う。初7日の前夜を「逮夜」といい、親類縁者を招いて供養をする。そして、1ヶ月後の命日である「初忌月」には特別な供物を供える。やがては、49日（ナナナノカ）の「満中陰」＝「中陰満」でもって「忌明け」とする。ちなみに、葬式後、遺骨を自宅に安置していた場合は、この49日をもって納骨するのが一般的である。この際、白木の位牌は、菩提寺に預けて「撻遣式」を行って燃やす。

この逮夜から「ナナナノカ（満中陰）」までの仏式の法事では、供物をほとんど供えないが、浄土宗では白いお膳に精進料理を供える。

ところで、49日までは納骨を終わっていないため、厳密には「葬」が終わったとは言えない。つまり、本来「葬」を終えて弔う期間と言うべきCの「□□□□□□→」において、Bの「葬」の状態が続いていると見なすことができる。その意味で、仏式はすでに提起した広義の「葬」でもって「葬」が終わると言うのが相応しいと考える。

一方、神式では葬儀後、同じく（表3）で示しているように10日ごとに「祭」を行うが、1日と15日には「月次祭」を行う。そして、月命日に「忌日祭」を行い、また毎日の朝晩に「祖霊舎」に食べ物をお供えたりすることもある。最近では、「帰家祭」を行ってから、すぐ繰り上げて10日祭を行い、その後、50日祭でもって「忌明け」とするケースが多い。

ところで、10日祭から50日祭までの供物は、(表2)の通夜祭か、あるいは出棺祭以降から、「常饌(飯)」ではなく米に替えて供え、また塩・酒・餅・果物・鯛・野菜・乾物(昆布)を捧げる。

本来、「忌明け」という習慣のないキリスト教においては、49日目にミサや礼拝を行ったりするが、これは仏教の影響と考えられ、いわば「仏督習合」と言えよう。一般的にキリスト教における死後の「祭」に近いのは、「追悼式」(追悼ミサ・追悼礼拝)⁽²⁵⁾と言われるが、供物は供えない。

ところで、日本では「年賀欠礼」という習慣がある。これは仏教、神道、キリスト教徒のいずれも、身内が亡くなったその1年間、つまり亡くなったその年の12月31日までが「喪中」と考え、新年の挨拶を控え、喪に服するものである⁽²⁶⁾。

(2) 韓国

韓国では、最近と前近代における「葬」の期間には、ずれが見られる。そこで、まず(表3)のCの期間で行われる儀式である、以下の(表7)の「祭」を終えることで、「葬」が終わると見なすのを広義の「葬」と定義する。

前近代では、この広義の「葬」をもって「喪明け」(韓国では、脱喪という)としてきた。要するに、(表3)のBやCを合わせた、つまり「忌中：喪中Ⅰ」と「忌中：喪中Ⅱ」が喪の期間である。しかし、最近(表4)における「省墓(墓参り)」つまり(表3)におけるBの期間である狭義の「葬」を終了した時点で、「忌明け」とする傾向が一般的である。(表3)に基づいて示すと、「忌中：喪中Ⅰ」をもって「忌明け」にするのである。

そこで、前近代における「葬」後から「忌明け」までの「祭」(韓国では、祭祀とする)について、(表7)でまとめた⁽²⁷⁾。

(表7) 前近代の韓国における「葬」後から「脱喪」に至るまでの「祭」

祭祀の種類	時期
上食	毎月の朔望(1日・15日)の朝夕
朔望祭	毎月の1日(朔日)と15日(望日)
卒哭祭	死後100日目
耐祭	卒哭祭の翌日
小祥(2年喪)	死後の満1年目
大祥(3年喪)	死後の満2年目
禫祭	大祥の翌々月の丁日、または亥日
吉祭	禫祭の翌月(「葬」より大凡27ヶ月目)の丁日、または亥日

*朔望は陰暦

前近代の韓国においては、狭義の「葬」が終わる「省墓(墓参り)」から帰家すると、祠堂に位牌(魂帛)を安置して、(表7)のような「祭」を行った。

そこで、毎月の朔望（1日と15日）の朝夕、位牌の前に食事を供える「上食」、また「朔望祭」を行う。ところで、100日目に「卒哭祭」を行うが、このときから飯が他の供物とともに供えられ⁽²⁸⁾、この後のすべての諸儀式でも飯と他の供物がセットとなって供えられるのである。

そして死後100日目の「卒哭祭」の翌日に「耐祭」を行う。その後、満1年目の命日（忌日）に「小祥」、満2年目の命日に「大祥」を行い、その3ヶ月後に喪服を脱ぐ「禫祭」、そして翌日の「吉祭」をもって、喪明けの「脱喪」とするのである⁽²⁹⁾。前近代における敬虔な儒教の信奉者（儒林）の中には、喪明けまで墓のそばに小屋を立てて墓守をする人もいた。

ところで、現在の韓国においては、「三虞祭」後の「省墓（墓参り）」をして「喪明け（脱喪）」にするため、（表3）のCの「□□□□□□→」の期間に行われる（表7）の「祭（祭祀）②→」は省かれ、すぐ「祭（祭祀）①→」から「法事・霊祭（祭祀）③」に入るのである。厳密に言えば、現代では死後1年目の命日から「忌祭祀」が行われることになる。したがって、（表7）における「小祥」・「大祥」以外の「祭」はすべてが省かれる。つまり、「小祥」は1年目、そして「大祥」は2年目の「忌祭祀」になる。

しかし、一部の仏教徒は、日本のように7日から49日までの「祭」を経て「忌明け」とすることがある。「葬」は儒教式で行ったものの、（表3）におけるCの期間である「葬」後から「忌明け」までに関しては、仏式の「祭」を採択するのである。7日ごとの初7日・14日・21日・28日・35日・42日・49日の49祭をもって行う。位牌は寺に安置して、遺族が7日ごとに訪れたり、あるいはすべてを寺に任せて、最後の49日にだけ遺族・姻族・親族・友人が集まって、「祭」を行う。

キリスト式も仏式の49日をもって「忌明け」とすることがある⁽³⁰⁾。そして、カトリック信者の「祭」は儒教式で行われるが、その理由の1つは、カトリックの伝来過程にある。つまり、儒教が国教であった朝鮮時代の正祖15（1791）年、カトリックが公認されていない中、カトリックを信じていた信者が「祭」を行わず、位牌を燃やした「珍山事件」が発覚して、尹持忠や権尚然が処刑される、いわゆる「辛亥邪獄」というキリスト教の迫害事件が起きた。当時のローマ法王は、この事態に憂慮して、朝鮮では祖先の祭祀を認めるようにしたのである⁽³¹⁾。ちなみに、韓国ではいずれの宗教においても、喪中にあたって日本のような「年賀欠礼」の習慣はない。

このように、前近代の日韓においては、「忌明け」の期間や時期、そして「祭」の種類が異なり、現代においても多少の差が見られる。ところで、日韓の仏式では、「忌明け」まで49日という期間は同じであるものの、日本は少数の宗派を除いて、基本的に供物は供えない。しかし、韓国の仏式では、「上食」と他の供物が捧げられる。なお、前近代の儒教式では、「卒哭祭」から「上食」と供物がセットになるのである。

4. 日韓における忌明け後の「祭」

(1) 日本の「祭」と弔い上げ

日本では、「忌明け」後、仏壇（仏教）、「祖霊舎」（神道）に位牌（霊璽・御霊代）、または写真を安置して、法事・法要（仏式）、霊祭（神式）が営まれるが、どんな「祭」がいつまで続けられるのか考察をする。

そこで、(表3)の「法事・霊祭(祭祀)③」に当たる日本の仏式と神式の「祭」を比較して整理すると、以下の(表8)の通りである⁽³²⁾。

(表8) 日本における忌明け後の仏式の法事と神式の霊祭

仏式	時期	神式
-	50日祭の翌日	清祓祭
-	清祓祭～100日祭	合祀祭
百ヶ日(施餓鬼会)	100日	100日祭
1周忌(祥月命日)	1年(亡くなったその月その日)	1年祭
3回忌	2年	2年祭
-	3年	3年祭
-	5年	5年祭
7回忌	6年	-
-	10年	10年祭
13回忌	12年	-
17回忌	16年	-
-	20年	20年祭
23回忌	22年	-
25回忌	24年	-
27回忌	26年	-
-	30年	30年祭
33回忌	32年	-
37回忌	36年	-
-	40年	40年祭
50回忌	49年	-
-	50年	50年祭
100回忌	99年	-
-	100年	100年祭

これらの「祭」は、現在は家ではなく寺・教会・会館などで行うこともあるが、神社では「霊祭」は行わない。(表8)は、仏式や神式における「忌明け」後の法事(法要)・霊祭である。この「忌明け」にあたって、仏式では白木の位牌を破棄して、漆塗りの黒、あるいは金箔塗りの位牌に替える。

ここで年忌は、回忌・周忌・年回ともいう。一方、キリスト教は決まった「祭」はないものの、遺族の希望によって、1周忌などにあたりミサや礼拝を行うことがある。これは周忌

とは言わず、追悼ミサ・追悼礼拝とするが、特別に司祭や牧師に依頼して故人を偲ぶ追悼式と言える。

仏式では、亡くなったその月その日を「祥月命日」（1周忌）といい、特別な供養をする。一部の宗派を除けば、基本的にほとんど供物は供えない。しかし、浄土宗では「忌明け」後の「法事」、つまり（表8）の法事で赤色のお膳に精進料理を供えるのは、すでに言及してきた。

ところで、この（表8）以外にも正月・盆・彼岸にも墓参りをして香を立て拜むが、供物は持っていかない。この中でも、盆は最も大きな祖先祭りであり、特に亡くなって初めて迎える盆や彼岸は、初盆・新盆、初彼岸と言って、普段の盆よりも盛大にする。盆は、明治期に陽暦を取り入れて以降、陽暦8月15日である。しかし、地域によっては旧暦の7月15日、または旧暦8月15日としているところもある。

この際、「盆花」を供えるが、普段の盆は季節の初物を中心に供える。例えば、米・粟・茄子と言ったものである⁽³³⁾。なお彼岸には、彼岸団子やおはぎを供える。

そこで、仏壇や祖霊舎のある家では、この法事や霊祭とは関係なく、毎日、飯と水を供える家庭もある。（表3）でもって言えば、Dの「↓→」のところである。つまり、右方向の矢印が、毎日、自宅の仏壇や祖霊舎に供える飯と水であり、下方向の矢印はその飯や水が法事や霊祭に吸収されていくという意味である。

神式では、すでに言及した通り、「葬」の過程における諸儀式で供えた供物が捧げられる。つまり、米・塩・酒・餅・果物・鯛・乾物（昆布など）を供える。

しかし、日本では「弔い上げ（トムライアゲ）」＝「弔い切り（トイキリ）」が行われる。つまり、年限を定めて「弔い上げ」にする特徴がある。（表8）における仏式の法事は、実際は33回忌、神式の霊祭は10年祭以降はほとんど行わない、「弔い上げ」が一般的である⁽³⁴⁾。「弔い上げ」になると、位牌は墓に納めたり、焼き払ったり、川に流したりする。

（2）韓国の「祭」と「弔い上げ」

前近代の韓国では、「葬」後、祠堂（家廟ともいう）⁽³⁵⁾に位牌（魂帛）を安置した。その後、「忌明け」とともに、（表3）における「法事・霊祭（祭祀）③」を行ったのである。しかし、近代国民国家形成期を境に祠堂はその姿を消していき、今はほとんどその存在をみることができない。そのため、祠堂に安置する位牌はなく、「祭」（祭祀）の都度、紙位牌（韓国では、紙榜とする）を作り、終わると燃やすのである。

ところで、すでに述べてきたように、韓国では「葬」を家で行っていたのが、今では葬儀屋へ委託する傾向にあるが、「祭」だけは現代でも各家庭で行っている。

そこで、（表3）の「法事・霊祭（祭祀）③」に当たる、前近代に行った「祭」は、以下の（表9）の通りである⁽³⁶⁾。

(表9) 前近代の韓国における「忌明け」後の祭祀

祭祀名	時期と内容
時祭(四時祭)	高祖父母まで年4回で2・5・8・11月(春夏秋冬)上旬
忌祭(忌祭祀)	4代までの祖先の命日
名節祭(節祀)	正月(1月1日)・寒食(清明の翌日)・端午(5月5日)・秋夕(8月15日)
墓祭	5代以上の祖先の墓の前で年1回
禰祭	季秋(9月)に亡き両親へ祭祀
祀堂祭	随時

*時期はいずれも陰暦

(表9)のように、前近代においては「忌明け」後、多くの「祭」があった。春夏秋冬、年4回にわたって行った「時祭(四時祭)」, 故人が死亡したその日に毎年1回行う「忌祭(忌祭祀)」がある。なお、「俗節」または「茶礼(차례)」とも言われる「名節祭(節祀)」は、正月・寒食・端午・秋夕の以外、上元(1月15日)・清明(春分後15日目)・重三(3月3日)・流頭(6月15日)・重陽(9月9日)・冬至(陽暦12月22日頃)・臘日(大晦日)に行うこともあった。

しかし、「忌祭」が真夜中に行われるのとは異なり、「名節祭」は朝や昼に行う。ちなみに、最近では正月＝「スルナル(설날)」・秋夕の「名節祭」を行った後、省墓(墓参り)に行くが、このときも、酒・果物・煎などの簡単な供物を持参する。

そして「墓祭」は、「忌祭」の対象外となった5代以上の祖先の墓を訪ねて、年1回行う「祭」である。「禰祭」は、毎年9月、亡き両親に対して行う。

これらの「祭」には、飯に加えて、他の供物の「酒果脯醢」・餅・煎などが供えられる。ちなみに、「忌明け」後の「祭」においては、「哭」は行わない。

ところで、「祀堂祭」は、随時、祀堂を訪ねて行く。つまり、新しい果物を収穫したときは、まず祀堂に供えて祀る。なお毎日、早朝に起床して祀堂の位牌に拝む「晨謁」、出かける際に外出と帰家を報告する「出入告」、そして官職に就いたときや子孫が生まれたときも祀堂に告げる。これらは季節の初物を供える以外は、供物なしで拝むのである。

この他にも、亡き両親の誕生日には「生辰祭」、還暦を行なわないうちに亡くなった場合は「祀甲祭」を行うこともある。

しかし、現代における韓国の家庭に受け継がれている「祭」は、「名節祭」の正月＝「スルナル(설날)」⁽³⁷⁾と秋夕(益)、「忌祭祀」だけである。寒食・清明には、簡単な供物を持参して省墓(墓参り)をするのが一般的である。ところで、同族の団結が強い家門や地域では、未だに「墓祭」が行われるところもあるが、ほとんど廃れていく傾向にある。この廃れの原因は、近代化に伴って若い世代が都会へ流出しているためと考えられる。

なお、韓国では祭祀において、日本のような年限という概念による「弔上げ」はない。

前近代の朝鮮時代、とりわけ『経国大典』（1469年の制定）によると⁽³⁸⁾、身分によって祀る対象が定められていた。つまり、正1品～従4品は4代、正5品～従6品は3代、正7品～従9品までは2代、一般庶民は父母に限られていたのである。しかし、甲午更張（1894年）を契機に、身分制が解除され、人々は4代までの祭祀を行うようになったのである。

さらに、前近代の伝統的な「冠婚葬祭」には無駄が多く煩雑だったため、1973年5月17日「家庭儀礼準則」が制定され、同年6月1日に施行するに至った。その中で「忌祭祀」に関しては、2代前の祖先に対して行うと定めた⁽³⁹⁾。とは言うものの、強制的なことではないため、一般的には4代までの「祭」が行われ続けてきている。

一般的に1世代を30年と見なして、韓国の4代までの「忌祭祀」の場合、毎年の命日ごとに、120年間も行われることになる。この「4代奉祭祀」の対象から外れると、位牌は墓に埋める。しかし、その後も「墓祭」の対象として奉られるため、韓国では世代によって「弔い上げ」が決まる方式ではあるが、故人に対する弔いが無期限に行われていると言っても過言ではない。

おわりに

日韓の「冠婚葬祭」における「祭」がいつから始まるのか、「葬」の後に「祭」が行われるという時系列的な認識をもたらす「忌明け」後の「祭」と、「葬」の過程における諸儀式について、供物を中心に比較を行った。さらに、この試みの中で、「葬」の過程、「葬」と「祭」の区切り、「忌明け」、「忌明け」後の「祭」やその種類、そして「祭」の「弔い上げ（トムライアゲ）」まで、日韓の比較分析を行って、その特徴も明らかにした。

つまり、日韓における「忌明け」後の「祭」における供物は、飯と他の供物がセットになっている。ところで、（表3）で見ると、死後、つまり「葬」の過程においても飯と供物が捧げられる「祭」が行われている。日本の仏式では、一部の宗派だけが供物を供えて、基本的には供物は捧げないとされているが、神式の（表2）や儒教式の（表5）では、「葬」の過程において「祭」と名付けられた儀式を行い、飯や供物を供えているのである。

詳しく整理をすると、神式では「葬」の過程における「枕直しの儀」から「常饌」（飯）・塩・水・酒、通夜祭や出棺祭から「常饌」（米）・塩・酒・餅・果物・鯛・乾物（昆布）などの供物を供える。儒教式においても、臨終してからこれと類似した「上食」（飯）と「酒果脯醢」・餅・煎などを捧げる。しかし、「葬」の過程から、神式は「常饌」と他の供物がセットで、儒教式では「上食」と他の供物が二分化されている。飯と他の供物がセットになるのは（表7）の「卒哭祭」からである。「葬」の過程における「祭」と名付けられた儀式では、飯は供えず、「酒果脯醢」・餅・煎などの供物が中心である。そこで、飯は生前の食事を意味するものと見なすことができよう。なお、そこから「祭」の供物の原型は飯以外の「酒果脯醢」・餅・煎などになったと考えられ、すでに「葬」の過程で「祭」が始まっていると見な

すことができる。

このように、基本的に「祭」とは、生前の礼を死後にも行うという意識が背景に敷かれているが、「葬」が終わってから行うという区切りはない。このことは、人が生きている間に行う礼を死後も同様に「祭」でもって行うということが、死後直後から「祭」を行うことを裏付けることにもなり、また死後に営まれる「祭」が人生儀礼の範疇に入っていると考えられる。したがって、日韓の「葬祭」は時系列的なものではないと言える。つまり「葬」が終わってから「祭」に移行するのではなく、「葬」と「祭」がほぼ同時進行で行われていることが裏付けられる。

さらに、前近代の日韓では、「忌明け」の期間や時期、そして「祭」の種類が異なり、現代においても多少の差が見られる。現在の日本では、仏式は49日、神式は50日でもって「忌明け」という意識が強い。一方、韓国の仏式では日本と同様49日であるが、儒教式では「三虞祭」の後、「省墓（墓参り）」が終わると「忌明け」と見なすのが一般的である。

そして、日本では「弔上げ（トムライアゲ）」が存在し、法事は33回忌、霊祭は10年祭以降は行わないのが一般的である。しかし、家によっては50回忌や50年祭まで行うこともある。一方、韓国では4代までの「祭」を行い、「墓祭」まで行う場合は、故人に対する弔いはほぼ無期限に近い。

最後に、日本における「葬」は、神式は除いて、寺・教会・会館などで行い、一方、「祭」は一般的に家で行う。その「葬」や「祭」では、ほとんど聖職者を招いて進められる。しかし、韓国では基本的に家で「葬」を行ってきたが、最近は葬儀屋で行う傾向にある。そして、たとえ故人がある宗教の信者であっても、「葬」や「祭」にほとんど聖職者は招かず、儒教式に進め、「祭」は必ず家で行うのである。

注

- (1) 宮田登『冠婚葬祭』（岩波新書、岩波書店、1999年）1頁。
- (2) 『四書集註諺解論語』（学古房、2004年、韓国）62頁。
- (3) 浄土宗中勝寺の藤井大俊住職にご教示をいただいた。以下の浄土宗に関することも同氏のご教示による。
- (4) 『目でみる韓国の産礼、婚礼、還暦、祭礼』（国書刊行会、1994年）112頁より引用した。
- (5) 韓国の「忌祭祀」は、次のように行われる。「降神→参神→初献→亜献→終献→添酌→挿匙正箸→闔門→啓門→献茶→徹匙覆飯→辞神→撤床→飲福」である。詳しくは、金奉鉉『朝鮮の通過儀礼』（国書刊行会、1982年）381～392頁を参照されたい。
- (6) 明治15（1882）年、「内務省通達」乙第70号ならびに「内務省通達」丁第10号による。
- (7) 千登三子監修『冠婚葬祭』（保育社、1979年）98～139頁。
- (8) 『冠婚葬祭大辞典』（ナツメ社、2000年）244～251頁を参考に作成した。
- (9) ゆづるは神社の澤田政泰司宮司から、最近は神式においても一部の人は仏式と同様、遺骨をもって帰宅し、50日祭、半年、1年後に納骨するケースがあるのご教示を頂いた。
- (10) 前掲『冠婚葬祭大辞典』252～257頁。

- (11) 前掲千登三子監修『冠婚葬祭』118頁より引用した。
- (12) 前掲宮田『冠婚葬祭』159～160頁。現在の「香典」とは、現金を包み、「葬」に持参して供えるのが一般的であるとする。
- (13) 前掲『冠婚葬祭大辞典』245頁より引用した。
- (14) 尹甲植『韓国典考』（明文堂、1988年、韓国）23～58頁や、キムジョンヒョク（김종혁）『朝鮮の冠婚葬祭（조선의 관혼상제）』（図書出版ジュンシム（중심）、2002年、韓国）151～245頁を参照されたい。
- (15) 韓東龜編著『韓国の冠婚葬祭－民俗学上よりみた今と昔－』（国書刊行会、1973年）248～336頁。
- (16) 祀堂に関して詳しくは、前掲李緯『四礼便覧』207～218頁を参照されたい。
- (17) 前掲キムジョンヒョク（김종혁）『朝鮮の冠婚葬祭（조선의 관혼상제）』185頁。
- (18) この哭の習慣については、『日本書紀』にも次のように記されている。なお、前掲韓東龜編著『韓国の冠婚葬祭－民俗学上よりみた今と昔－』281頁では、高麗時代に人を雇い入れて代わりに哭をしていた、つまり「喪中乃代哭不絶声」の風習を指摘している。
- (19) 前掲金奉鉉『朝鮮の通過儀礼』338～340頁。
- (20) 2009年2月16日、死去した韓国カトリック教会の金寿煥枢機脚の「葬」で、儒式教の祭祀である「三虞祭」が行われたと『朝鮮日報』（2009年2月21日）は報じている。つまり、カトリックの「葬」に儒教式の祭祀が混ざっているのである。
- (21) 韓国の葬式について、詳しくは金聖培『韓国の民俗』（成甲書房、1982年）209～225頁、前掲尹甲植『韓国典考』23～39頁、『韓国百科（第2版）』（大修館書店、2002年）92～94頁に参照されたい。
- (22) 『四書集註諺解中庸・大学』（学古房、2004年、韓国）60頁。
- (23) 中でもプロテスタントは、「葬」や「祭」において儒教式に沿って行いながらも韓国風の御辞儀はしない。これは偶像崇拜に当たるとの見解によるものと言われる。
- (24) 『年中行事・儀礼辞典』（東京美術、1978年）を参照されたい。
- (25) 前者はカトリック教会、後者はプロテスタント教会で用いる用語である。
- (26) 田中治郎『お寺と神社の作法ブック』（学研、2008年）105頁では、現在は、忌は初7日まで、喪は49日までが通念で、一般的には忌中が49日、喪中が1年と表現されるとする。
- (27) 前掲韓東龜編著『韓国の冠婚葬祭－民俗学上よりみた今と昔－』314～318頁、前掲尹甲植『韓国典考』59～63頁、前掲李緯『四礼便覧』155～194頁を参考にして作成した。
- (28) 前掲李緯『四礼便覧』155～194頁。
- (29) 1995年、朝鮮民主主義人民共和国の金日成が亡くなって、3年（実際の期間は満2年）で「喪明け」という報道は記憶に新しい。
- (30) 韓国の「連合ニュース」（2009年4月5日）は、カトリック教会の金寿煥枢機脚の死去（2009年2月16日）から49日目の2009年4月5日をもって追悼を終えるミサが行われたと報道している。つまり、韓国のカトリック教会においても仏教の49日に合わせて追悼期間を設けていたのである。そもそもキリスト教では、死後49日という考えは存在しない。但し、供物を供えないカトリック式の儀式である。
- (31) 詳しくは『正祖実録』、そして赤木仁兵衛「朝鮮における天主教流入に典礼問題に対して」（『史学雑誌』56-6・7・8号、史学会、1947年）に参照されたい。
- (32) 前掲千登三子監修『冠婚葬祭』や『年中行事・儀礼辞典』（東京美術、1978年）を参照されたい。
- (33) 野沢謙治・山羊康幸「江戸時代の祖先祭祀」（『祖先祭祀の歴史と民族』弘文堂、1986年）213頁。
- (34) 竹田亘「祖先の祭り」（『祖先崇拜の比較民俗学－日韓両国における祖先祭祀と社会－』吉川弘文館、1995年）30～31頁。
- (35) 祀堂については、前掲李緯『四礼便覧』207～218頁を参照されたい。なお、王室は宗廟、孔子を奉る

のは文廟，そして地方と国家を代表する先賢をまつるのは祀宇とする。

(36) 前掲李緯『四礼便覧』219～248頁。

(37) 拙稿「韓国の正月」(『教育タイムス』株式会社タイムス，2005年2月11日)では，「名節祭」として定着している正月の帰省ラッシュやその料理について述べている。

(38) 『経国大典』(図書出版シンソウォン(신서원)，2005年，韓国) 242頁。

(39) 「家庭儀礼準則」(大統領令第6680号，1973年5月17日制定，1973年6月1日施行)。第4章(祭礼)第18条(忌祭)第1項による。

(付記)

なお，この論文の作成にあたっては，浄土宗中勝寺の藤井大俊住職・ゆづるは神社の澤田政泰宮司からご教示をいただいた。記して謝したい。